

鹿児島県総合教育センター

令和元年度長期研修研究報告書

研 究 主 題

「既習の語彙で伝わった！」を実感できる

高等学校英語科学習指導の工夫

県立鹿児島工業高等学校

教諭 脇本 由里香

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	2
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題についての基本的な考え方	
(1)	既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫について	2
(2)	目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫について	2
2	研究主題に関する実態の分析と考察	
(1)	実態把握の概要	3
(2)	実態調査の実施方法	3
(3)	実態調査の結果と分析	3
3	調査結果から明らかになった研究の方向性	
(1)	研究の構想	5
(2)	主体的に英語でコミュニケーションを図り、即興的にやり取りできる生徒を育成するための二つの視点	5
4	検証授業Ⅰの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	6
(2)	単元構想の概要	7
(3)	検証授業Ⅰ実施上の工夫	7
(4)	単元計画	9
(5)	検証授業Ⅰの実際	10
(6)	検証授業Ⅰの成果と課題	12
(7)	検証授業Ⅱに向けて	12
5	検証授業Ⅱの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	13
(2)	単元構想の概要	13
(3)	検証授業Ⅱ実施上の工夫	13
(4)	単元計画	17
(5)	検証授業Ⅱの実際	17
(6)	検証授業Ⅱの手立てに関する成果と課題	18
6	生徒の変容と考察	
(1)	授業後の実態調査の結果から	18
(2)	振り返りシートと実態調査の結果からみる、研究に基づく手立てによる生徒の変容	19
(3)	生徒の発話の比較	21
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	22
2	研究の課題	22
※	参考文献	

I 研究主題設定の理由

グローバル化が進む現代社会において、生徒を取り巻く環境は急速に変化している。それに伴い、高等学校学習指導要領（平成30年告示）では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力の一つとして、生きる力を具体化した「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか。」という内容を示している。このことから、社会・世界と関わりをもち、広い視野を身に付けるために、英語はますます重要な役割が求められていることが分かる。しかし、本校に入学してくる生徒は、ものづくりや専門科目に対する興味関心は高いが、英語への興味関心が低く、苦手意識をもつ生徒が多い。そのような中、就職後3～5年で海外勤務をする者もあり、企業側からは、「間違いを恐れず積極的に英語でコミュニケーションを図ることができる人材」を求める声が年々増えてきている。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説外国語編では、第3節外国語科の目標(3)が次のように示されている。

- ・ 外国語教育における「学びに向かう力、人間性等」は、生徒が言語活動に主体的・自律的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である。
- ・ 「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し、考えを形成・深化させ、話したり書いたりして表現することを繰り返すことで、生徒に自信が生まれ、主体的・自律的に学習に取り組む態度が一層向上するため、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」は不可分に結び付いている。
- ・ 生徒が興味をもって取り組める言語活動を段階的に取り入れたり、自己表現活動を工夫したりするなど、様々な手立てを通して生徒の主体的・自律的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導をすることが大切である。

しかし、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」における私の授業を振り返ると、内容理解を中心とした教師主導の教え込みの授業になってしまっており、生徒が実際に英語を用いて自己表現できる場の設定や指導が不十分であった。

そこで、本研究では、二つの視点を中心に授業を設計し、生徒の英語学習への苦手意識を軽減させ、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育む指導の在り方を明らかにする。

第一の視点は、生徒に身に付いている既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫である。毎時間の言語活動の中で、「相手に伝わった」という成功体験を積み重ね、英語が使える自信を育てる工夫を取り入れる。

第二の視点は、自己表現活動の工夫である。自己表現活動の設定と、その活動の明確なゴールを提示することで、生徒が見通しをもって学習に取り組む姿勢を育成する。

このような工夫を授業に取り入れることで、生徒の英語に対する苦手意識を軽減し、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度や、即興的にやり取りする力を育みたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

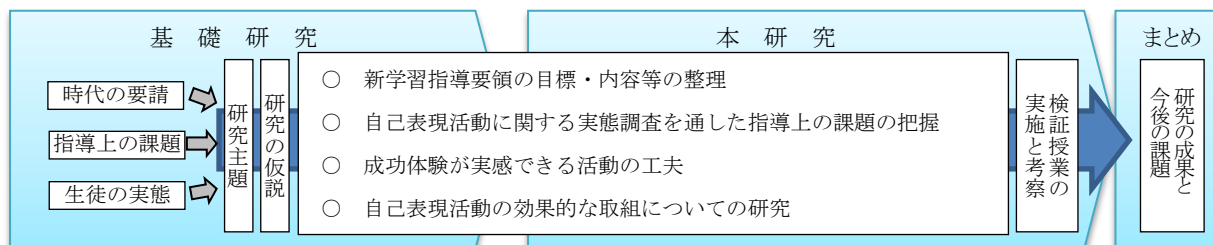
1 研究のねらい

- (1) 生徒の実態調査を分析し、実態を把握するとともに、指導上の課題を明らかにする。
- (2) 生徒が既習の語彙等を用いて英語を話して「相手に伝わった」と実感できるような取組について検証・考察する。
- (3) 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための取組について検証・考察する。
- (4) 検証授業を通して仮説を検証するとともに、本研究の成果と課題を明らかにする。

2 研究の仮説

生徒が既習の語彙等を用いて英語を話して「相手に伝わった」と実感できるような取組や、目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させることで、「主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度」や「即興的にやり取りする力」を育成できるのではないかと。

3 研究の計画



Ⅲ 研究の実際

1 研究主題についての基本的な考え方

- (1) 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫について

教師と生徒間、または生徒同士で英語でのコミュニケーションを行う際、生徒は、相手に伝えたい内容に対応する語彙を知らなければ、発言を諦めることがある。これまで、授業の中で Small Talk を行った際に、次のようなやり取りがよく見られた。

S1: What is your favorite spot in Kagoshima?*
S2: My favorite spot is Iso beach.
S1: Oh, Iso beach. Why?
S2: Because I can swim and 「両棒餅がおいしい。」ってなんて言うんだっけ？
S1: (沈黙)

*下線部は、あらかじめ生徒に提示した英文である。

ここで S2 の発話が途中から日本語になってしまったのは、「両棒餅がおいしい。」という日本語を、「そこではおいしい両棒餅が食べられるんだよ。(You can eat good *Jambo-mochi* there.)」と変換できなかったからなのか、「両棒餅」という日本語を、英語でどのように表現したらいいのかわからなかったからなのかは特定できない。しかし、上の例のように、中学校までの既習の語彙や文法を用いて英語で表現できるであろう文脈で、生徒が沈黙してしまう場面をよく目にしてきた。

生徒の言語知識には限界があるため、自分の知っている知識の範囲内で、言い換え(パラフレーズ)、身振り手振りなどを駆使して、何とか自分の考えを伝えようとする力を伸ばす必要がある。しかし、これまで特別な指導は行ってこなかった。知らない語彙があっても、諦めずに既習の語彙や表現を用いて別の表現方法で言い換える指導を行えば、この問題は解決できる。さらに、この活動を通して、「自分の知っている語彙や表現を用いて、相手に言いたいことを伝えることができた。」という成功体験を積ませることで、積極的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と発信力の育成を目指す。

- (2) 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫について

ア 指導計画の工夫について

指導をする中で、「授業の中で、生徒が実際に英語を使う機会を増やしたい。」と考えつつも、そのための時間を生み出すことは難しいと感じてきた。50分の授業で、新教材を教師が導入し、その内容を生徒が頭の中で理解し、理解した英語を駆使して自分の意見や考えを表現するまでの3段階を経る場合、教材に使われている英語が難しかったり、題材が生徒にとってなじみの薄いもので背景などの説明に時間を要したりすると、自己表現活動の時間を確保することは難

しくなってくる。授業の大半を教科書の内容理解に費やしているにもかかわらず、内容の定着は教師が期待するよりも薄い。

教科書の内容理解に時間をかけているにもかかわらず効果が上がらない原因として、「教科書の内容を理解させる。」ことが目的になってしまっており、「教科書の内容を読みながら生徒に何を考えさせたいか、読んだ後に生徒に何を表現させたいか。」という視点が足りないことが考えられる。

そこで、本研究では、一単元内で、自己表現活動を取り入れるための指導計画を工夫する。具体的には、教師による教材の内容説明にかかる時間の短縮と、生徒の内容理解を助けるために、ワークシートの改善を行うことで、自己表現活動の時間を生み出す工夫を行う。

イ 具体的な工夫について

生徒が言語活動を行う際、その活動に必然性を感じられなければ、積極的に取り組むことは難しい。田中(2003)は、自己表現活動を行う上での、生徒の表現意欲を高める言語活動の工夫を次のように示している。

必然性を高める	実際に起こりそうな場面を考える。相手を生徒の身近な人（ALTなど）に設定する。表現するための自然な目的を与える。
具体性を高める	言語活動内容を具体的に指示し、生徒に見通しをもたせる。生徒の背景知識を活性化させる（ブレインストーミングなど）。
自己関連性を高める	自分のことに置き換えて考えさせる。生徒にとって身近な人物を活動に活用する。他教科での学習を生かす。学校行事や学校内外での活動を生かす。
自由度を高める	生徒に選択肢を与える。

自己表現活動のテーマを決定する際や具体的に取り組ませる過程で、これらの工夫を取り入れることで、生徒に意欲的に活動に取り組ませたい。

また、自己表現活動を行う必然性を高めるという点で、自己表現活動にパフォーマンス課題を取り入れる。教師が作成したパフォーマンス課題のルーブリックを、単元の始めに、パフォーマンス課題と共に生徒に提示することで、生徒は単元を通してどのような力を付ければいいのかを明確にすることができる。同時に、到達目標も明らかになり、自分の目標達成のために、主体的にパフォーマンス課題に取り組むことが考えられる。さらに、取り組みの中で自分の考えを英語で表現することで、その経験が「知識・技能」の獲得への意欲を向上させ、「発信力」の育成につながると考える。

2 研究主題に関する実態の分析と考察

(1) 実態把握の概要

研究主題についての基本的な考えを踏まえて、本校生徒の実態を、「英語の学習に対する関心・意欲・態度」や「英語を話すことに対する関心・意欲・態度」などの項目について把握し、分析することにした。

(2) 実態調査の実施方法

調査等の名称	実施の時期	調査の対象
生徒の実態調査 (アンケート)	令和元年6月	県立鹿児島工業高等学校第1学年9クラス (347人)

(3) 実態調査の結果と分析

「英語の学習は好きか。」という調査項目に対して、肯定的な感情をもっている生徒は全体の4割強に留まっている（図1）。否定的な感情をもつ生徒の主な理由として、「英語が苦手だから。」と答える生徒が大半を占めた。このことから、英語に対して苦手意識をもって高校へ入学してくる生徒が全体の6割弱存在することが分かる。

「英語を話すことは好きか。」という調査項目に対しても、肯定的な感情をもっている生徒は4

割強であったが、「将来、英語で話せるようになりたいか。」という調査項目に対しては、8割以上の生徒が肯定的な感情をもっていることが分かった。

また、英語の言語活動の中で最も興味がある活動として、「話すこと〔やり取り〕」を選んだ生徒が全体の4割を占め、他の領域より圧倒的に多かった（図2）。

これらの調査結果から、生徒たちは英語の学習や英語で話すことに対して苦手意識をもちつつも、英語を話せるようになりたいと思っていることが分かった。

また、「授業で英語を話して伝わったという成功体験があったか。」という調査項目に対しては、肯定的に答えた生徒は全体の約4割であったが、「英語で話すことは好きだ。」と答えた生徒の約7割近くが、成功体験があったと答えていることが分かった（図3）。このことから、授業中に英語を話して伝わったという成功体験が、英語で話すことを好きになることにつながると捉えた。

「英語を話すときに、困っていること」という調査項目に対しては、「文法力がない。」「文章構成力がない。」という回答が一番多く、次いで、「語彙力がない。」「知らない単語を分かりやすい表現で言い換える力がない。」という回答が多かった（図4）。

「英語を話すときに、間違いを恐れず話すこ

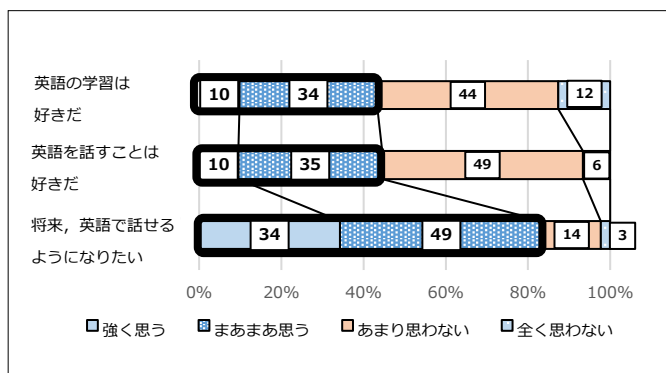


図1 英語に対する意識

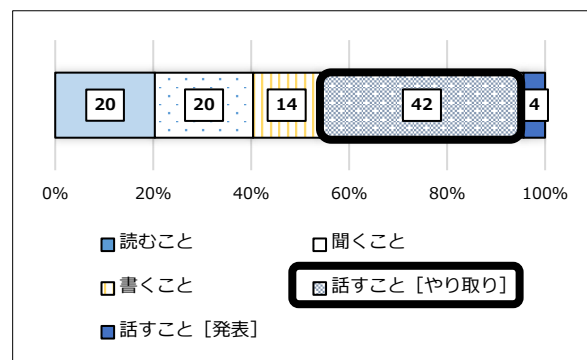


図2 最も興味がある活動

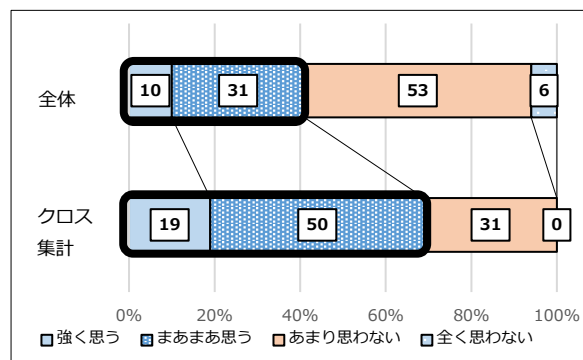


図3 授業で英語を話して伝わったという成功体験

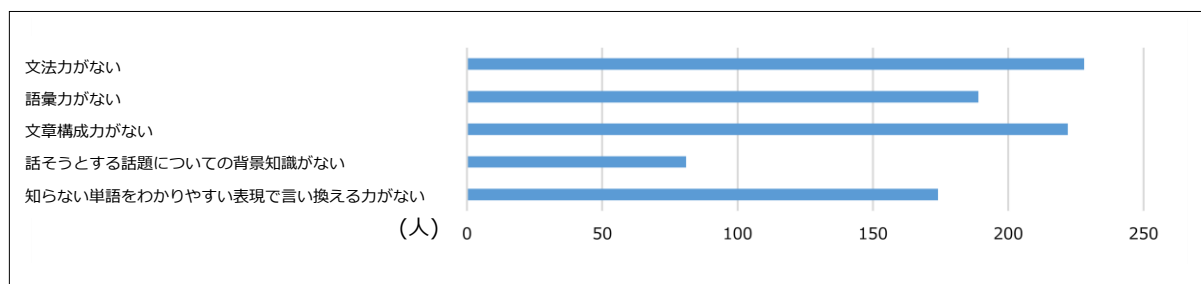


図4 英語を話すときに、困っていること

とができるか。」という問いに対しては、7割弱の生徒が否定的な感情をもっており（図5），その理由として、「間違った英語を話すのが怖い。」「自分の英語が正しい英語でなければ恥ずかしい。」という回答が多かった。

英語を話すときの抵抗感に関しては、クラス全体の前で英語を話すことに対し、7割以上の生徒が抵抗感をもっていることが明らかになった。その反面、ペアやグループで話すことに対して抵抗

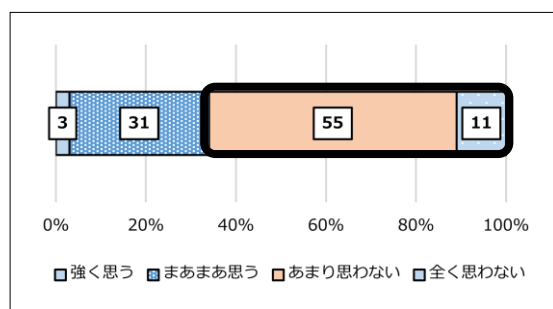


図5 英語を話すとき間違いを恐れない

がある生徒は、全体の3割強であることも分かった(図6)。このことから、まずはペアやグループでの活動で英語を話すことに慣れ、全体での発話につながるように工夫する。

3 調査結果から明らかになった研究の方向性

(1) 研究の構想

実態調査の結果から、全体の8割以上の生徒が、将来的には英語を話せるようになりたいと考えていながらも、英語の学習や英語を話すこ

とについては抵抗感をもっている生徒が半数以上いるということが分かった。この原因として、英語に苦手意識をもつ生徒の多くが、授業で学んだ表現を、実際のコミュニケーションの場面で活用できた経験が少ないことが考えられる。授業や授業外で実際に英語を使用する場面が少ない場合、生徒が自身の英語力を判断する基準は、定期考査や実力考査の結果となる。これまで私が作成してきた試験では、たいていの場合、文法が正しく使われているか、単語の綴りを正しく書けているか、授業で指導した内容を覚えているか、というような記憶力を測る内容の出題が多かった。結果として、これらの試験でよい成績を収めることができなければ、英語が苦手、英語が嫌い、という感情に結び付いてしまうことが想像できる。

さらに、これまでの私の指導を顧みると、「読むこと」に偏った、教科書の内容理解中心の授業になっており、生徒が自分の考えを英語で書いたり、話したりする時間を十分に確保できていないことが課題だった。実態調査の結果から、英語を話すことに対して苦手意識がある生徒の意欲を向上させるには、成功体験を積み上げさせ、英語を話すことへの前向きな姿勢を養うことが有効であると考えた。そして、単元構想に自己表現活動を位置付け、活動を充実させることで、生徒は苦手意識を克服し、自信をもって自分の考えを英語で発信することができるようになるのではないかと考える。

そこで、本研究では、既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」という成功体験を実感できる指導の工夫と、目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫という二つの視点を取り入れることで、生徒の英語学習への苦手意識を軽減させ、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度や、即興でやり取りをする力を育成することにした(図7)。

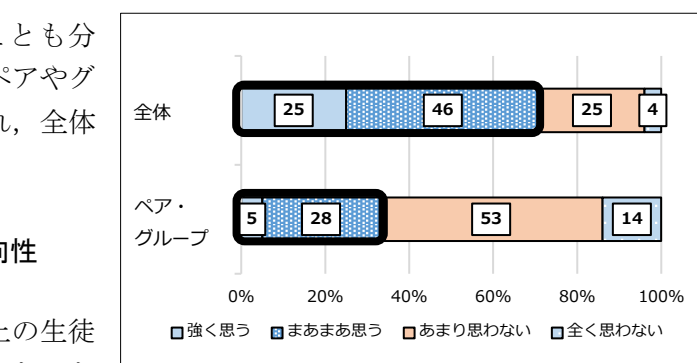


図6 英語を話すときの抵抗感

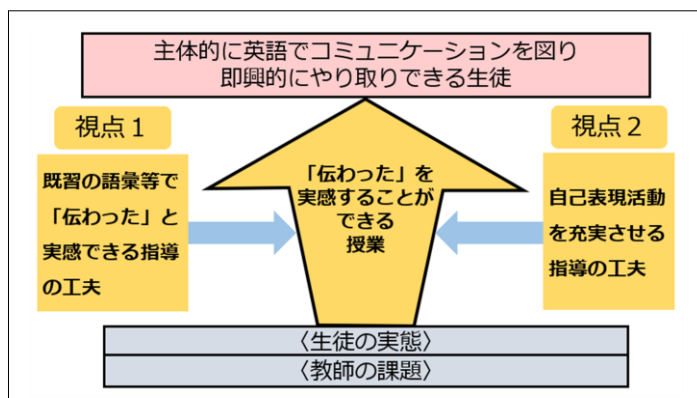


図7 研究の構想図

(2) 主体的に英語でコミュニケーションを図り、即興的にやり取りできる生徒を育成するための二つの視点

ア 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫について

英語において正確性は大切な要素ではあるが、正確性を気にするあまり間違いを恐れ、何も発言できなくなってしまつては、コミュニケーションは成り立たない。私たちは、母語を習得する過程では、数え切れない間違いを繰り返し、失敗から学び、その経験を次に生かす、という過程を経ている。英語を習得する過程でも、正しい英語で伝えようとするよりも、まず言いたいことをどうにか伝えるために、また、自分の言ったことが相手に伝わっていないときに、他の表現で言い換えたり、具体例を出したり、似ている語を用いたりしてなんとか伝えよ

うとすることも重要である。

Swain(1985)は、第二言語習得において、「自分が伝えたいこと」と「自分が言えること」の間にギャップがあることに気づき、そのギャップを埋めようとするのが重要であると述べている。そこで、言い換えや婉曲的な表現を用いて単語の説明をする方法の指導を行う、帯活動の時間を設定する。具体的には、既習の語彙を用いて、単元に関わりのある単語や写真について相手に説明し推測させたり、英語で伝えにくい日本語を、英語で説明したりする、という活動を毎回の授業の中に設定した。なお、ここでの「帯活動」とは、毎回の授業で短時間、継続的に、生徒の英語への興味や学習への意欲を高め、言語材料を定着させることなどを目的に行うものである。

英語を話すときの抵抗感は、クラス全体の活動よりもペアやグループでの活動の方が低いという実態調査の結果を踏まえ、帯活動は二人一組で行うこととした。生徒の英語への苦手意識に配慮しながら、単語レベルで説明させ、活動に慣れてきたら文で言わせたり、接続詞を入れさせたりすることで、段階的にレベルを上げていく。英語に苦手意識をもつ生徒は、英語での自己表現に自信がなく、発言にためらいを感じる人が多いので、答えを推測させることができたペアは着席できるというようなゲーム性を取り入れることで、生徒が活動を楽しみながら発言できるようにする。説明の仕方次第で、相手が答えを推測できるかどうかが決まるので、「相手に伝わった」という成功体験を得やすい活動であると考えた。

また、説明に用いる語彙や表現は無数にあるので、活動後にどのような説明を行ったかを生徒に尋ね、全体で共有したり、教師の考えた説明を共有したりすることで、生徒たちはこれまで気付かなかった別の表現を知ることができる。

この帯活動を通して、生徒の成功体験を増やし、同時に、「この英語の授業では少しくらい間違っても恥ずかしくない。」という雰囲気教室の中で作り、「間違えることは恥ずかしいことではなく、間違いから学び、次に生かすことができればいい。」ということに気付かせる。

イ 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫について

実態調査結果では、スピーチやプレゼンテーション（以下、「プレゼン」という。）などの「話すこと〔発表〕」は生徒に一番人気のない活動であったが、表現の能力を高める点で重要な活動であり、聞き手を説得できるように、論理的に話すことができるという能力は、現代社会においても様々な場面で必要とされている。そこで、プレゼンを通して「自分の考えを正確に、分かりやすく伝える。」という力を伸ばしたい。そのために、目的や場面、状況を明らかにした取り組みやすいテーマを設定し、原稿作成手順を示した上で、生徒が興味をもって取り組めるような手立てを工夫する。プレゼン原稿の作成の際は、聞き手が理解しやすい表現を用いること、聞きたくなるような内容にすることを意識させる。また、ルーブリックを提示することで、到達目標を明らかにさせる。さらに、プレゼン後に生徒同士の質疑応答を充実させることで、即興的にやり取りする力の育成を目指す。

4 検証授業Ⅰの実施と考察

(1) 検証授業Ⅰの概要

ア 検証授業Ⅰの単元名及び実施学年等

単元名	Chapter 2 Around the World
実施学年	県立鹿児島工業高等学校 第1学年2クラス 80人
実施時期	令和元年7月上旬
実施時間	2時間

イ 検証授業Ⅰのねらい

(ア) 身の回りのものや表現について、既習の語彙等を用いて、相手に説明することができる。 視点1
(イ) 「自分が旅行会社の新入社員だとしたら、どの国へどのような手段で行くことを薦めるか。」というテーマで、グループ内でプレゼンを行うことができる。 視点1 視点2

- (ウ) グループメンバーの発表を聞き、相互評価を行うことができる。**視点2**
 (エ) 各グループのベストプレゼンターの発表を聞き、自分の発表の参考にすることができる。**視点2**

(2) 単元構想の概要

ア 単元構想

検証授業Ⅰでは、「話すこと〔発表〕」の指導領域を中心にした学習を計画した。そのため、本単元のまとめの自己表現活動として、英語によるプレゼンを設定した。

イ 単元の特徴

本題材は、様々な方法で世界一周に挑戦した冒険家たちの話を読み、彼らの様々な移動手段やエピソードを楽しむという内容である。人類が地球をどのように捉えていたかという考えの変化が時系列で提示されていたり、冒険家たちの移動手段や、移動にかかった時間の表現方法が繰り返し提示されていたりすることから、生徒にとって読みやすい題材であると考えられる。

(3) 検証授業Ⅰ実施上の工夫

本研究における視点を基に、検証授業Ⅰでの手立てを次の表のようにまとめた。

研究の視点	研究の視点と関連した手立て
視点1 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫	○ 2分間パラフレーズチャレンジ① 「身近なものを英語で説明してみよう！」 ○ 2分間パラフレーズチャレンジ② 「英語に訳しにくい日本語を英語で表現してみよう！」
視点2 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫	○ プレゼンテーマ設定の工夫 ○ コンセプトマップの活用 ○ プレゼンのモデル文提示 ○ ルーブリックの提示 ○ グループ内プレゼンの実施

ア 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫

検証授業Ⅰでは、授業開始時に、既習の語彙や表現を用いて「相手に伝わった」という成功体験を感じ、英語を話すことへの自信を付けさせるための帯活動を設定した。この帯活動を「2分間パラフレーズチャレンジ」と名付け、辞書を使わずに自分の知っている語彙や表現だけで、どう表現するか、ということに挑戦させる活動とした。活動にはゲーム性をもたせることで、楽しみながら英語を発話できる工夫をし、正確さを重視するよりも、「相手に伝わった」というコミュニケーションを重視することを意識させ、生徒が間違いを恐れずに発言できるように学習への積極性をもたせることに留意した。

(ア) 2分間パラフレーズチャレンジ①「身近なものを英語で説明してみよう！」

○ 活動の目的

- ・ 「○○を英語で説明したいけど何と云えばいいんだろう。」という疑問をもたせるために、生徒に身近なものを提示し、自分の知っている単語を駆使して英語で伝える体験をさせる(図8)。
- ・ 伝えたい言葉を表す英語を知らない場合に、他の語や表現を用いて、遠回しに表現する婉曲表現を身に付ける。

○ 活動の手順

- ① 二人一組で、じゃんけんをする。
- ② 勝った生徒だけが、教師が提示した絵や写真を見て、説明する日本語を確認する。
- ③ 勝った生徒はスライドに提示された日本語を自分の知っている単語で説明する。このとき、教師は机間指導し、生徒の説明を聞く。
- ④ 負けた生徒は説明を聞いて、答えを推測する。正解したペアは着席する。
- ⑤ 大半の生徒が着席したら、教師は全員着席させ、どのような説明が分かりやすかったかを尋ね、全体で共有する。その後に、教師の用意した説明を提示する。



図8 2分間パラフレーズチャレンジ①の例

今回は、英語を話すことへのハードルを下げ、積極的に相手に伝えようとする態度を促すために、文で説明できなくても、連想する単語を伝えたり、ジェスチャーを加えたりすることを可とした。

- (イ) 2分間パラフレーズチャレンジ②「英語に訳しにくい日本語を英語で表現してみよう！」

○ 活動の目的

- ・ 日本語と英語の一对一の逐語訳を避けるために、その日本語が表す内容を具体的にイメージし、平易な日本語に言い換えて、それを自分の知っている語彙で表現する体験をさせる（図9）。

A: テストの点数どうだった？

(How was your test?)

B: 教えない。

(I don't want to tell you about it.)

A: なんで？教えてよ。俺、口は堅いよ。

(Why? Tell me.)

図9 2分間パラフレーズチャレンジ②の例

イ 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫

(ア) プレゼンテーマ設定の工夫

プレゼンのテーマ設定にあたり、生徒にとって、より必然性が高いものにすることに留意した。数年後に就職をして社会人になる高校生という立場から、いずれは自分の会社の商品やサービスを提供し、薦める立場になると考え、「自分が旅行会社の新入社員だとしたら、どの国へどのような手段で行くことを薦めるか。」というテーマを設定した。

(イ) コンセプトマップの活用

情報や考え、気持ちなどを整理し、プレゼン原稿を書く際の手助けになるように、事前の宿題としてコンセプトマップを作成させた。ここでは、「お薦めする国」についての情報収集のための項目（渡航方法、観光名所、有名人、人気の食べ物など）を設定した（図10）。

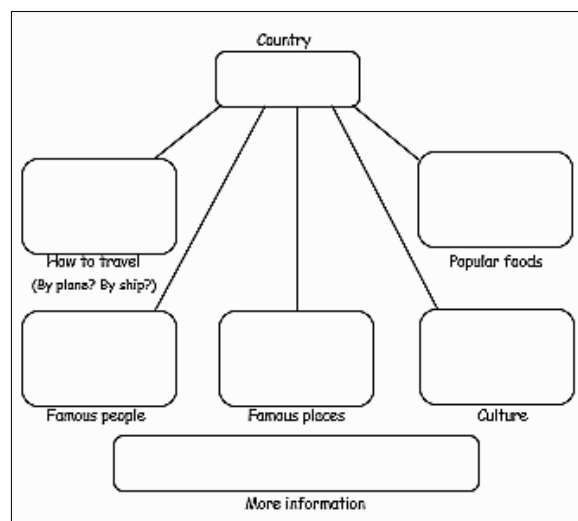


図10 コンセプトマップ

(ウ) プレゼンのモデル文提示

英語が苦手な生徒がプレゼン原稿を作成する際に、文章作成の参考にすることができるように、教師の作成したモデル原稿を提示した（図11）。

Model presentation script

Hi, I am Yurika. Today, I am going to tell you why you should go to Australia. I have three reasons to support my idea.
First, you can see cute koalas and kangaroos in Australia. If you are lucky, you can see wild kangaroos when you are driving.
Second, Australia has many beautiful beaches. You can enjoy swimming and eating delicious seafood there.
Third, the time difference between Australia and Japan is only one hour. So, you don't need to worry about jet lag.
For these reasons, I recommend you to go to Australia.

訳：こんにちは、ゆりかです。これから、なぜオーストラリアに行くべきかプレゼンします。3つの理由を述べます。

第1に、オーストラリアではかわいいコアラやカンガルーを見ることができます。もしラッキーなら、運転中に野生のカンガルーを見ることができます。

第2に、オーストラリアには多くの美しいビーチがあります。そこで泳いだり、おいしいシーフードを楽しめます。

第3に、オーストラリアと日本の間には時差が1時間しかありません。だから、時差ぼけの心配もありません。

これらの理由から、オーストラリアに行くことをお薦めします。

図11 プレゼンのモデル文

(エ) ルーブリックの提示

生徒が見通しをもって授業に参加できるよう、単元導入時に、単元終末にプレゼンを行う

ことなどが分かる単元計画を提示した。そして、プレゼンのテーマと、それに伴うループリック（図12）を提示することで、生徒はプレゼンでは何が評価されるのかが明らかになると同時に、到達目標が明確になり、自分の到達目標を達成するために、意欲的にプレゼンに取り組むことが期待される。

点数	原稿の内容	英語の伝わりやすさ	原稿の分量・暗唱	発音・声の大きさ	アイコンタクト
4 (ふみふみ)	お薦めする国について三つ以上の理由が述べられている。	意味が伝わりにくい語彙や表現がなく、分かりやすい英文である。	1分以上のプレゼンテーションで、メモを見ずに発表している。	発音やイントネーションが適切で、聞き取り易い。	聞き手の目を見て、訴えかけるように話している。
3 (標準)	お薦めする国について二つ以上の理由が述べられている。	意味が伝わりにくい語彙や表現が含まれているが、問題ない程度の英文である。	1分以上のプレゼンテーションだが、たまにメモを見ている。	発音やイントネーションの一部に聞き取りにくいものがあるが、コミュニケーションのうえでは問題ない程度である。	聞き手の目を見ていないときもあるが、コミュニケーションのうえでは問題ない程度である。
2 (あまりよくない)	お薦めする国について一つは理由が述べられている。	意味が伝わりにくい語彙や表現が多く、伝わりにくい英文である。	1分以下のプレゼンテーションで、メモをほとんど見ている。	発音やイントネーションの一部に聞き取りにくいものがあり、コミュニケーションのうえでは不都合が生じることがある。	聞き手の目を見ていないときがあり、コミュニケーションのうえでは不都合が生じることがある。
1 (よくない)	お薦めする国について理由が一つもない。	意味が伝わりにくい語彙や表現が多すぎて、全く伝わらない英文である。	30秒程度のプレゼンテーションでメモをほとんど見ている。	発音やイントネーションの不適切さのため、コミュニケーションのうえでは明らかに不都合が生じている。	聞き手の目を見ておらず、コミュニケーションのうえでは明らかに不都合が生じている。

図 12 プレゼン用ループリック

(オ) グループ内プレゼンの実施

クラス全体の前での発表には抵抗感を示す生徒が多いという実態調査の結果から、4人グループでプレゼンを行うこととした。ループリックを基に、相互評価を行った（図13）。その評価を受けて、グループの中でベストプレゼンターを一人選出し、クラス全体での発表を行った。なお、グループ内プレゼンの際は、司会者、計時係を決め、スムーズに進行できるよう留意した。

Judge Paper(評価表) グループメンバーのプレゼンを評価しよう。						
Name	原稿の内容	英語の伝わりやすさ	原稿の分量・暗唱	発音・声の大きさ	アイコンタクト	Total
	4-3-2-1	4-3-2-1	4-3-2-1	4-3-2-1	4-3-2-1	
	Memo					

図 13 グループ内相互評価で使用した評価表

(4) 単元計画

時	主な学習内容	指導の重点			
		S	W	L	R
第1時	課全体の導入と内容スキーマの活性化、Part1の概要・要点	○		○	○

	の把握				
第2時	Part1 の文法演習, 音読練習		○		○
第3時	Part2 の概要・要点の把握, 音読練習	○		○	○
第4時	Part2 の文法演習, 音読練習		○		○
第5時	Part3 の概要・要点の把握, 音読練習	○		○	○
第6時	Part3 の文法演習, 音読練習		○		○
第7時	帯活動, ジグソー法による Part3 の復習, プレゼン原稿作成	○	○	○	○
第8時	帯活動, プレゼン (グループ発表, 全体発表)	○		○	

S…Speaking W…Writing L…Listening R…Reading

(5) 検証授業Ⅰの実際

ア 7時間目／8時間

	活動内容	生徒の活動	指導上の留意点
10分	1 帯活動 (1) 2分間パラフレーズチャレンジ①「身近なものを英語で説明してみよう！」 (2) 2分間パラフレーズチャレンジ②「英語に訳しにくい日本語を英語で表現してみよう！」	- 英語で挨拶をする。 - ペアでじゃんけんをする。 - 勝った方は、提示された絵(本時は冷蔵庫と浮き輪の絵)を英語で説明する。 - 負けた方は、説明を聞き、何の絵の説明か推測する。 - ペアで、提示された日本語(「口が堅い。」)をどのように英語で表現するか考える。	- 間違えることを恐れずに、積極的に活動することを促す。 - 生徒にとって身近なものを絵で提示することで、生徒が簡単な英語で説明できるようにする。 「いつ、どこで、だれが、何のために」などの観点を与えることで、どのように対象物を表現するか、を考えさせる。 - 教師の考えた説明を提示することで、どのような表現が考えられるか全体で共有する。(※) 「英語に訳しにくい日本語」→「易しい日本語」→「易しい英語」の順で、まずは別の日本語の表現に言い替えるようアドバイスをする。 (例:「口が堅い。」→「秘密を守ることができる。」) * 繰り返し
3分	2 本時の学習の流れと学習目標の確認	本時の学習目標: グループメンバーと協力して Part3 の復習を行い、プレゼン原稿を作成しよう。	
15分	3 前時までの新出語の確認 4 ジグソー法によるグループ活動	① グループメンバーが、それぞれ違う冒険家たちに関する英文を読む。 ② 英文を覚え、ホームグループに戻ってから、ほかのグループメンバーにその内容を伝える。 ③ グループメンバー4人全員の情報が集まったら、「一番長期にわたって旅を続けた冒険家は誰か。」という問いを解決する(図14・15)。	- 次時のグループ内プレゼンが円滑に進むようにするために、ジグソー法を用いて、グループ活動を行う。 - 机間指導を行い、必要に応じてアドバイスをを行う。
17分	5 プレゼン準備 (1) ルーブリックの提示 (2) 教師によるモデルプレゼン (3) プレゼン原稿作成	- ルーブリックを確認する。 - 教師のモデルプレゼンを見る。 - 事前に宿題で記入したコンセプトマップを基に、プレゼン原稿を作成する。	- ルーブリックを提示することで、プレゼンの到達目標を明らかにさせる。 - 教師のモデルプレゼンを見せることで、プレゼンのイメージをさせる。 - 机間指導で英文作成のアドバイスをする。
5分	6 まとめ	教師のまとめを聞く。	- 本時のまとめをする。 - 原稿を見ずに発表できるように、音読練習してくるよう伝える。

	Name	Nationality (国籍)	How did he travel around the world? (旅の手段)	How long did it take him to travel? (どのくらいかかったか)	Who took the longest journey? (誰が一番、日数がかかったか)
A	Dave Kunst				
B	Dick Smith				
C	Steve Fossett				
D	Yoshikazu Debori				

図 14 ジグソー法で用いたワークシート

Dave Kunst A An American, Dave Kunst, walked all the way around the world for the first time in human history. He spent four years from 1970 to 1974 and wore out 21 pairs of shoes while he was walking.	Dick Smith B An Australian explorer, Dick Smith, made the first solo helicopter flight around the world from 1982 to 1983.
Steve Fossett C In 2002, an American, Steve Fossett, completed the first nonstop balloon flight around the world. He spent 15days for the travel.	Yoshikazu Debori D A Japanese, Yoshikazu Debori, traveled around the world by bicycle. He spent about nine years to finish his trip.

図 15 ジグソー法で用いた4種類の英文

イ 8時間目／8時間

	活動内容	生徒の活動	指導上の留意点
10分	1 帯活動 (1) 2分間バラフレーズチャレンジ①「身近なものを英語で説明してみよう！」 (2) 2分間バラフレーズチャレンジ②「英語に訳しにくい日本語を英語で表現してみよう！」	- 英語で挨拶をする。 - ペアでじゃんけんをする。 - 勝った方は、提示された絵（本時はかき氷の絵を提示）を英語で説明する。 - 負けた方は、説明を聞き、何の絵の説明か推測する。 - ペアで、提示された日本語（「居心地がいい。」「緊張している。」）をどのように英語で表現するか考える。	- 間違うことを恐れずに、積極的に活動することを促す。 - 生徒にとって身近なものを絵で提示することで、生徒が簡単な英語で説明できるようにする。 「いつ、どこで、だれが、何のために」などの観点を与えることで、どのように対象物を表現するか、を考えさせる。 - 教師の考えた説明を提示することで、どのような表現が考えられるか全体で共有する。（*） 「英語に訳しにくい日本語」→「易しい日本語」→「易しい英語」の順で、まずは別の日本語の表現に言い替えるようアドバイスをする。 (例:「居心地がいい。」→「リラックスできる。」「緊張している。」→「心臓がドキドキする。」「家に帰りたい気分。」) * 繰り返し
2分	2 本時の学習の流れと学習目標の確認	本時の学習目標： グループ内プレゼンを行い、ルーブリックを基に相互評価をしよう。また、グループから選出されたベストプレゼンターの発表を聞き、自分のプレゼンの参考にしよう。	
33分	3 プレゼン練習 4 グループ内プレゼン	- 個人でプレゼンの練習をする。 - ペアでプレゼンを見せ合う。	生徒が声に出して練習しやすいようにBGMをかける。

	5 ベストプレゼンターによるプレゼン	・ グループ内で役割(司会・計時・質問係)を決める。 ・ ルーブリックに基づき、グループ内で相互評価をする。 ・ グループ内でベストプレゼンターを選出する。 ・ ベストプレゼンターの発表を聞く。	・ 生徒が自信をもてるように、聞き手は良い点を伝えたり、アドバイスをしたりするように促す。 ・ 生徒がルーブリックを使って相互評価できるように声掛けする。 ・ 発表内容について教師が全体に質問することで、聞き取った内容を共有する。 ・ ベストプレゼンターのプレゼンで良かった点を発表させることで、自分のプレゼンの参考にさせる。
5分	6 まとめ	・ より良いプレゼンにするために気付いた点を言う。	・ より良いプレゼンするために気付いた点を生徒に発言させることで、より魅力的なプレゼンするために必要なことに気付かせる。 ・ 全体的に多かった文法の間違い、発音の間違いを共有することで、次回に生かせるように促す。

(6) 検証授業Ⅰの成果と課題

手立て	成果	課題
視点1 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫	・ 2分間パラフレーズチャレンジを繰り返すことで、未知の単語や表現するのが難しい日本語でも、対象物や日本語の表す意味を自分なりに解釈すると表現できることを生徒に認識させることができた。	・ 2分間パラフレーズチャレンジで、生徒にとって身近なものや表現を選んだことで、教科書の内容とつながりが薄いものに偏ってしまった。
視点2 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫	・ 前時にグループ活動を行うことで、グループ内の人間関係を作り、パフォーマンス課題に取り組みやすくることができた。 ・ ルーブリックの評価項目を意識させたことで、個人練習時に時間を計ったり、ジェスチャーの練習をしたりする姿が見られた。 ・ ルーブリックで目指す姿を明確にさせたことで、ルーブリックの評価項目を見ながら、相手のプレゼンを真剣に聞く姿が見られた。	・ モデル文を提示したことで、モデル文の一部を書き換えただけのプレゼン原稿が多くなった。 ・ ルーブリックの評価項目が多かったせいで、相互評価の際、プレゼンの内容理解に集中させることができなかった。

(7) 検証授業Ⅱに向けて

既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」という成功体験を感じることができると帯活動の工夫により、「授業の中で英語を話して伝わったという達成感があった。」という項目に対し、9割の生徒が肯定的な感想を示した。

2分間パラフレーズチャレンジ①では、「単語でもいいからできるだけたくさんのヒントをあげよう。」という目標が、英語が苦手な生徒にとっては、取り組みやすかったという感想があった。また、活動後に、相手により伝わり易い表現を辞書で調べる姿が見られた。しかし、2分間パラフレーズチャレンジで扱った単語や表現が、単元の内容とつながりが薄いものであったので、「なぜこの単元でこの活動をするのか、という疑問が残った。」という感想もあった。検証授業Ⅱでは、より単元の内容とつながりのある語句や表現を選び、その後のプレゼンの中で、生徒がうまくパラフレーズできるような流れを考えたい。

目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための工夫については、「教師のモデル原稿があったから文章が書きやすかった。」という感想が多かったが、モデル文の一部の単語を書き換えるだけの原稿も多く見られたので、検証授業Ⅱでは、モデル文から発展した文章を作れるように工夫をする。

ルーブリックに関しては、生徒がプレゼン原稿を作る際に参考にしている姿が見られた。しかし、相互評価の際に、相手のプレゼンを聞きながら評価するには項目が多かったので、検証授業Ⅱでは、項目の精選を行いたい。また、聞き手に、プレゼンの内容をより理解してもらうために、

効果的なICT機器の使用も計画したい。

5 検証授業Ⅱの実施と考察

(1) 検証授業Ⅱの概要

ア 検証授業Ⅱの単元名及び実施学年等

単元名	Chapter 4 My “Cool Japan”
実施学年	県立鹿児島工業高等学校 第1学年2クラス 80人
実施時期	令和元年12月上旬
実施時間	4時間

イ 検証授業Ⅱのねらい

(ア) 日本文化に関係するものや表現について、既習の語彙等を用いて、相手に説明することができる。	視点1
(イ) “My Cool Japan” というテーマで、ALTやクラスメートに対してプレゼンを行うことができる。	視点1 視点2
(ウ) グループメンバーの発表を聞き、相互評価を行うことができる。	視点2
(エ) 各グループのベストプレゼンターの発表を聞き、質疑応答を行うことができる。	視点2

(2) 単元構想の概要

ア 単元構想

検証授業Ⅱでは、検証授業Ⅰでの学習内容を基に「話すこと〔発表〕」の指導領域を中心とした学習を計画した。検証授業Ⅰでは、暗記したプレゼン原稿を読むだけの作業になっている生徒が多くみられたので、本単元では、プレゼンを聞き取った後に質疑応答を行うことで、即興的にやり取りする力の育成を図る。

イ 単元の特徴

本題材は、4人の外国人が、それぞれ、日本文化で素敵だと思っていることについて述べたエッセーである。「コンビニの品揃えの豊富さ」、「ラジオ体操の文化」、「入浴の習慣」、「あんぱんやカツ丼などの日本風西洋料理」についてのエッセーを読み、日本文化といえば寿司や着物だけではなく、私たちの日常にあるものが、外国人の視点から見ると独特で魅力的である、ということに気付かせてくれる題材である。

来年度は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、多くの外国人が日本を訪れるタイミングであり、生徒にとっても興味深い内容であると考え。筆者は「あなたにとっての日本の良さは」と問いかけており、「話すこと」の自己表現活動を行わせるのに適していると考え。

(3) 検証授業Ⅱ実施上の工夫

本研究における視点を基に、検証授業Ⅱの各自の手立てを次の表のようにまとめた。

研究の視点	研究の視点と関連した手立て
視点1 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫	○ 2分間パラフレーズチャレンジ 「身近なものを英語で説明してみよう！」 ○ コミュニケーションの対象を意識した原稿作成の工夫
視点2 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫	○ 自己表現活動の時間を生み出すための工夫 ○ 生徒によるICT機器の活用 ○ 教師によるモデルプレゼンの提示 ○ ルーブリックの提示 ○ グループ内プレゼンの実施 ○ ベストプレゼンターによるプレゼン後の質疑応答

ア 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫

(ア) 2分間パラフレーズチャレンジ

「身近なものを英語で説明してみよう！」

検証授業Ⅰでは、2分間パラフレーズチャレンジで扱った表現が、単元とつながりが薄いものだったので、検証授業Ⅱでは、単元内の表現やプレゼンで扱う語彙や表現でパラフレーズできる工夫をした。本単元では、外国人から見た日本の魅力的な点が題材になっているので、日本文化に関わりのある語句を設定した(図16)。また、検証授業Ⅰでは、主に単語でヒントを伝えていたので、検証授業Ⅱでは、「いつ」、「どこで」、「だれが」、「どんなふうに」という視点で、文で説明するように促す。接続詞のwhenを使った文章でヒントを伝えることができることを目標に、チャレンジさせた。



図 16 2分間パラフレーズチャレンジの例

(イ) コミュニケーションの対象を意識した原稿作成の工夫

スピーチやプレゼンを行う際、聞き手が理解しやすい内容にするために、帯活動の言語活動で意識した、「どうやったら相手に伝わるか」という視点で、原稿を作成させた。具体的には、教師が作成した、未知語を多く含んだ原稿サンプルを提示し、伝わりやすい原稿になるように改善策を考えさせることで、辞書などで調べた語彙や表現を発表時に使用すると、聞き手が理解できない可能性が高いことを意識させた。

イ 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるため指導の工夫

(イ) 自己表現活動の時間を生み出すための工夫

教師による教材の内容説明にかかる時間の短縮と、生徒の内容理解を助けるために、ワークシートの改善を行った。具体的には、教材を読む前にワークシートから内容を推測させ、リスニングで概要を聞き取らせたり(図17-1)、新出語の意味を英文で書かれたdefinition(定義)から推測させたりした(図17-2)。また、文法事項は演習問題を宿題とすることで、定着を図った。

Task 1 Let's think!
Let's think together before reading the textbook! (本文を読む前に考えよう！)
Q1 Do you think Japan is "a cool country"? (yes / no)
Q2 Which part of Japan is cool to you? ()
Q3 Do you think Japan is "a cool country" to people in foreign countries? (yes / no)
Q4 Which part of Japan is cool to foreigners? Please guess. ()

Task 2 Prediction (予想しよう)
Marilia is talking about something. Let's predict what she is talking about.
(ブラジル人の Marilia が、「あるもの」について話しています。CD を聞く前に、①～⑤に入る言葉を予想してみよう。)



Marilia Melo

(①) がとっても素敵だと思うわ。
ブラジルには、こういった (②) は無いわ。
日本ではどこでも、確実に1つは、①を見付けられるし。
特に、異なる季節に異なる (③) を楽しめるのが好き。
冬には (④) , 夏には (⑤) を楽しめるわ。

図 17-1 ワークシートの例

Task 4 Vocabulary
 After reading the definitions, fill in the meanings by using the Japanese word lists below. (単語の定義を読んで、下から意味を当てはめよう。)

行	word	meaning	definition
0	cool		very good or fashionable
2	term		a word or groups of words with a particular meaning
2	cultural		connected with customs, ideas, beliefs, etc of a society or country
2	aspect(s)		one part of a situation, idea, plan etc that has many parts
3	society	社会	a particular large group of people
3	impact		a powerful effect or impression
4	trend(s)		a fashion or general direction
8	surely		without doubt

・ カッコいい, すばらしい ・ 影響, 衝撃 ・ 言葉
 ・ 局面, 側面 ・ 確かに, 必ず, きっと ・ 傾向, 情勢 ・ 文化の, 文化的な

図 17-2 ワークシートの例

(イ) 生徒によるICT機器の活用

調べ学習の際、瞬時に情報にアクセスし、多くの写真の中から、自分のプレゼンの内容をよりよく表している写真を選ぶことを目的に、タブレット端末と授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」（株式会社LoiLo製）を取り入れた授業を構成した。タブレット端末は、プレゼンの準備段階において、インターネット上での情報収集や、プレゼン時に写真を提示する際に使用させた（写真1）。



写真 1 グループ内プレゼンの様子

(ウ) 教師によるモデルプレゼンの提示とルーブリックの提示

検証授業Ⅰでは、教師の作成したモデル文の一部を書き換えただけのプレゼン原稿が目立ったので、英語が苦手な生徒も文章構成に困らないようにするために、モデル文（図18）を提示する際に、論理的文章の構成の説明を行い、Opinion、

1. プレゼン原稿の構成を知ろう。

Opinion	I think Mt. Fuji is very cool. I have three reasons.
Reason1	First, Mt. Fuji is one of the world heritages in Japan. It became a world heritage in 2013.
Reason2	Second, many people climb it every year. About 208,000 people climbed it last year.
Reason3	Third, you can enjoy hot spring after climbing. Many people from foreign countries enjoy it, too.
Opinion	For these reasons, I think Mt. Fuji is cool and you should visit it.

図 18 論理的文章の提示

Reasonの例一覧		
便利さ	It is very convenient.	それはとても便利です。
	You can buy anything there.	そこでは何でも買えます。
	It is very light and easy to carry.	それはとても軽くて持ち運びがしやすいです。
例え（比喻）	It is like ○○.	それは○○のようです。（○○に似ています。）
比較	It is as ~ as ○○.	それは○○と同じくらい～です。
	It is the tallest ○○ in the world.	それは世界一背の高い○○です。
気持ち	It is very fun to play.	それはプレイするのがとても楽しいです。
	It is very exciting to play.	それはプレイするのがとても興奮します。
	It is very moving.	それはとても感動します。
	It is so relaxing.	それはとてもくつろげます。
	It makes us happy.	それは私たちを幸せな気持ちにしてくれます。

図 19 プレゼン原稿作成用お助け表

Reasonなどの文章の書き方も説明した。

また、英作文の際に参考になるようなお助け表も配布した（図19）。ループリックに関しては、検証授業Ⅰで評価項目が多かったことが課題であったので、検証授業Ⅱでは、評価項目を精選した（図20）。

点	Content (内容)	Eye Contact	Voice
3	三つ以上の理由が述べられており、とても内容が具体的である。	ほとんどメモを見ずに、聞き手の顔を見て話ができている。	効果的に声の大きさを変え、聞き手が分かりやすいように話している。
2	理由が二つは述べられている。	何度かメモは見るが、聞き手の顔を見ようとする姿勢が見られる。	声の大きさは良いが、抑揚をつけて話していない。
1	理由が一つしかない。	ほぼメモを見て話し、聞き手の顔を見ようとしない。	声があまり聞こえず、抑揚をつけて話していない。

図 20 プレゼン用ループリック

(エ) グループ内プレゼンの実施

検証授業Ⅰと同様に、4人グループ内でプレゼンを行った。検証授業Ⅰ後の生徒の感想から、グループ内で司会者がうまく進行をしていたという感想が多く見られたので、今回も司会者を決めさせた。進行表も提示し（図21）、グループ内でのプレゼンがスムーズに行われるよう促した。また、グループ内で相互評価を行った後は、ベストプレゼンターを選出し、全体発表をする際の紹介文を作成させ（図22）、発表の際は、グループメンバー全員が前に出るようにした。

Facilitator(進行係)用		
1	Who will go first? / Who will go next?	誰から始めますか？/次は誰がしますか？
2	OK. Mr.(Ms.) ○○, please start.	では○○君（さん）、始めてください。
3	Let's decide the best presenter of our group!	(4人の発表が終わった後で) 私たちのグループのベストプレゼンターを決めましょう。
4	What were good about his(her) presentation?	その人のプレゼンのどこがよかったですか？

図 21 司会者用進行表

Best presenter 紹介文（グループのメンバーが1人1文担当してください！）	
・ We chose _____ 君（さん） as the best presenter. (僕たちのグループは _____ 君（さん）をベストプレゼンターに選びました。)	
・ Because his(her) _____ was very good. (なぜなら彼の（彼女の） _____ がとてもよかったからです。)	
・ Please listen to his(her) presentation carefully! (それではよく聞いて下さい。)	

図 22 ベストプレゼンター紹介文

(オ) プレゼン後の質疑応答

検証授業Ⅰでは、グループで選出されたベストプレゼンターが全体で発表した後に、教師から内容確認の質問を投げかけた。その際、生徒同士がプレゼンの内容について質疑応答をする場面がなかった。そこで、検証授業Ⅱでは、ベストプレゼンターの発表後に、内容に関する質疑応答の時間を設けた。

生徒にとって英語での質疑応答は、難易度が高いので、事前にALTによるサンプルのプレゼンを聞かせ、どのような質問が考えられるかを考えさせた。また、発表者への質問を考える際は、グループで話合わせ、参考になるように、「Questionお助け表」（図23）を配布し、活用させた。質問に対しては、ベストプレゼンターとそのグループメンバー全員で協力して答えさせるようにした。

Question お助け表 (what, when, where, who, which, why, how を使ってみよう！)		
1	Do you like ○○ very much? Why?	○○が大好きなんですか？なぜ？
2	Have you ever been to ○○?	○○に行ったことはありますか？
3	Have you ever used ○○?	○○を使ったことはありますか？
4	What is ○○ in Japanese?	○○は日本語でなんですか？
5	What ○○ do you like the best? Why?	どの○○が一番好きですか？なぜ？
6	When is the best season to ~?	～するのに一番いい季節はいつですか？
7	Who is your favorite ○○?	一番好きな○○は誰ですか？
8	Who do you want to go there with?	だれとそこへ行きたいですか？
9	Which ○○ do you recommend?	どの○○がおすすめですか？
10	Which do you like better, ○○ or △△?	○○と△△では、どちらが好きですか？

図 23 Question お助け表

(4) 単元計画

時	主な学習内容	指導の重点			
		S	W	L	R
第 1 時	課全体の導入と内容スキーマの活性化, Part1 の概要・要点の把握, 音読練習	○		○	○
第 2 時	Part2 の概要・要点の把握, 音読練習			○	○
第 3 時	Part3 の概要・要点の把握, 音読練習			○	○
第 4 時	Part4 の概要・要点把握, 音読練習			○	○
第 5 時	プレゼン準備 (文章構成を知る) タブレット端末活用①			○	○
第 6 時	プレゼン準備 (原稿作成, 練習) タブレット端末活用②	○	○		
第 7 時	プレゼン (グループ内相互評価, 全体発表) タブレット端末活用③	○		○	

(5) 検証授業Ⅱの実際

ア 7 時間目 / 7 時間

	活動内容	生徒の活動	教師の活動
6 分	1 帯活動 2 分間パラフレーズ チャレンジ①「身近なものを英語で説明してみよう！」	- 英語で挨拶をする。 - ペアでじゃんけんをする。 - 勝った方は、提示された絵 (本時は箸とたこ焼きの絵) を英語で説明する。 - 負けた方は、説明を聞き、何の絵の説明か推測する。	- 間違ふことを恐れずに、積極的に活動することを促す。 - 生徒にとって身近なものを絵で提示することで、生徒が簡単な英語で説明できるようにする。 「いつ、どこで、だれが、何のために」などの観点を与えることで、どのように対象物を表現するか、を考えさせる。 - 教師の考えた説明を提示することで、どのような表現が考えられるか全体で共有する。
2 分	2 本時の学習の流れと学習目標の確認	本時の学習目標： 一人一人が聞き手を意識して、プレゼンを行い、発表後には質疑応答をしよう。	
37 分	3 プレゼン練習 4 グループ内プレゼン 5 ベストプレゼンター	- 個人でプレゼンの練習をする。 - ペアでプレゼンを見せ合う。 - グループ内で役割 (司会・計時・質問係) を決める。 - ループリックに基づき、グループ内で相互評価をする。 - グループ内でベストプレゼンターを選ぶ。	- 生徒が声に出して練習しやすいようにBGMをかける。 - 生徒が自信をもてるように、聞き手は良い点を伝えたり、アドバイスをしたりするように促す。 - 生徒がループリックを使って相互評価できるように声掛けする。

	によるプレゼン 6 質疑応答	ンターを選出する。 ・ ベストプレゼンターの発表を聞く。 ・ グループ内で質問を考え、発表者に質問する。	・ グループ内で質問を考えさせることで、英語で質疑応答を行うことへの抵抗感を軽減させる。 ・ 生徒の質問をパラフレーズすることで、発表者や他の生徒が質問の意図を理解できるようにする。 ・ ALTに質問をしてもらうことで、よい質問の見本を生徒に提示する。
5分	7 まとめ	・ プレゼンを通して気付いた点を言う。 ・ 振り返りシートに自己評価を書く。	・ 生徒に振り返りをさせることで、本時での学びを深める。

(6) 検証授業Ⅱの手立てに関する成果と課題

手立て	成果	課題
視点1 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫	・ 2分間パラフレーズチャレンジ①は、回を重ねることで、生徒たちが説明する文のレベルが上がった。主語と動詞で構成された文で説明しようとする生徒が増え、接続詞whenの使い方に定着が見られた。 ・ コミュニケーションの対象を意識させたことで、相手を意識した分かりやすい語彙を用いる、という感覚が定着し、プレゼン原稿でその成果が見られた。	・ 2分間パラフレーズチャレンジ①では、答えを推測する生徒の発話を促す手立てが少なかったことで、発話量に偏りが出てしまった。
視点2 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための工夫	・ タブレット端末を活用したことで、生徒の選んだプレゼン写真を一斉に共有することができ、他の人のプレゼンを聞いてみたいという生徒の気持ちが高まった。 ・ 検証授業Ⅰでは、プレゼン原稿作成の際、モデル文の一部を書き換えるだけの生徒が多かったが、検証授業Ⅱでは、教師が論理的文章の構成を説明したことで、自分で考えた表現を用いた原稿が多く見られた。 ・ 「Questionお助け表」を活用させたことで、質疑応答に積極的に挑戦する姿が見られた。	・ プレゼンの準備段階で、発音、イントネーション、アイコンタクトなどの指導が十分にできなかったことで、プレゼンを聞く段階で、生徒間にリスニングの差が見られた。 ・ ルーブリックの項目を精選し過ぎたために、生徒はメモなしで発表できていなかった。

6 生徒の変容と考察

(1) 授業後の実態調査の結果から

グラフは、6月の対象生徒に実施した実態調査と12月の検証授業Ⅱ後の『英語に関するアンケート』の結果の比較である。「英語の学習は好きか」という問いに対して、6月の段階と比べて、「強く思う。」、「まあまあ思う。」という肯定的な回答に増加が見られた。そして、「全く思わない。」という回答が16ポイント減少したことが分かる(図24)。英語の学習に対して肯定的な理由としては、「授業の内容が理解できるから。」という項目が6月と比較して一番伸びている

(図25)。「英語の学習が好きではない。」生徒の理由が、全ての項目で減少していることも分かった(図26)。

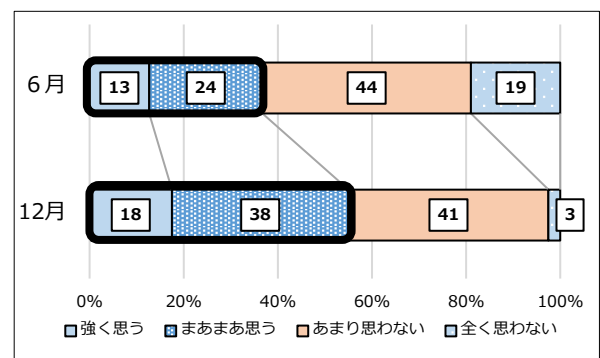


図24 英語の学習は好きか

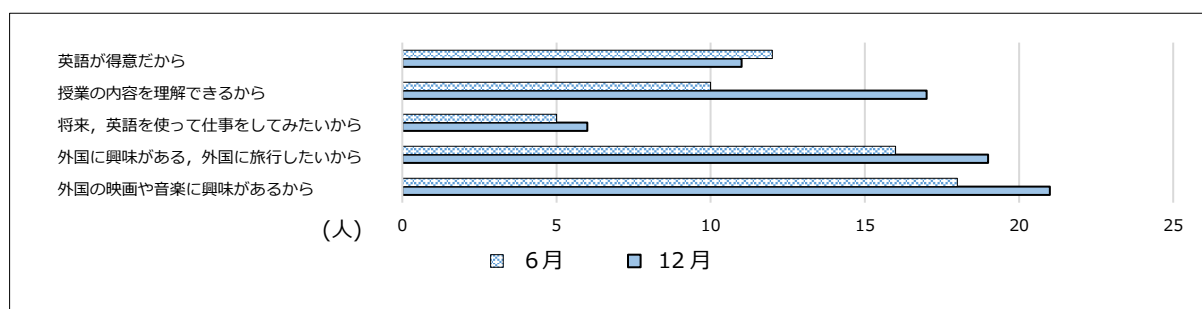


図 25 「英語の学習が好きか」という問いに対し、「強く思う」または「まあまあ思う」と答えた理由

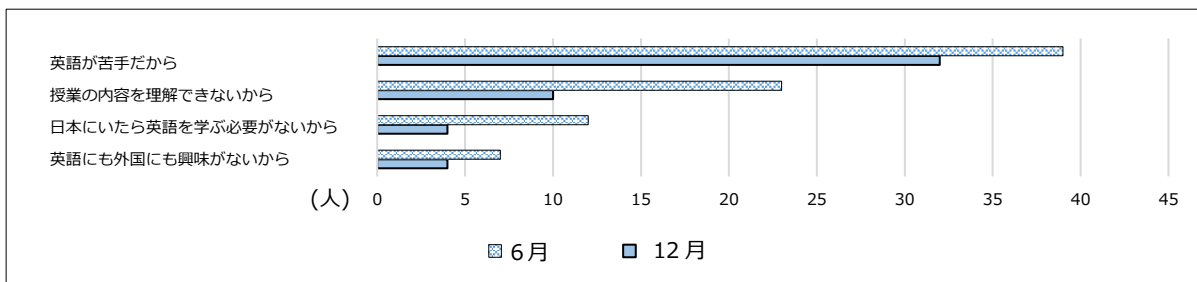


図 26 「英語の学習が好きだ」という問いに対し、「あまり思わない」または「全く思わない」と答えた理由

(2) 振り返りシートと実態調査の結果からみる、研究に基づく手立てによる生徒の変容

ア 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫

本研究において、「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫として、既習の語彙を用いて相手に説明をする2分間パラフレーズチャレンジを行った。授業の中で英語を話して伝わったという成功体験を感じた生徒が大幅に増加したことが分かる(図 27)。このことが、英語学習に対する肯定的な感情を増加させたと考えられる(図 24)。また、「英語を話すときに困っていること」として、「知らない単語を分かりやすい表現で言い換える力がない。」という項目が減少したことから、未知の語彙であっても、自分で考えた表現でなんとか伝えようとするようになったと、生徒自身が自覚していることが伺える(図 28)。振り返りシートの記述内容からも、この帯活動が印象に残っていると答えた生徒が多かった(図 29)。

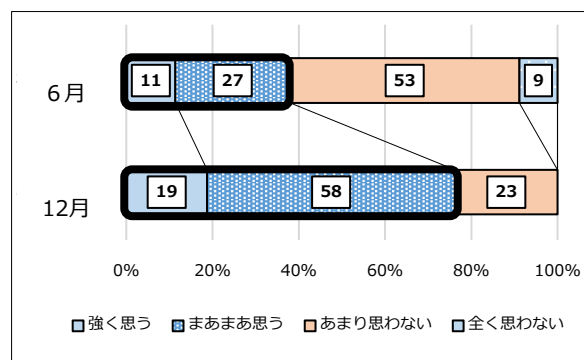


図 27 授業で英語を話して伝わったという成功体験

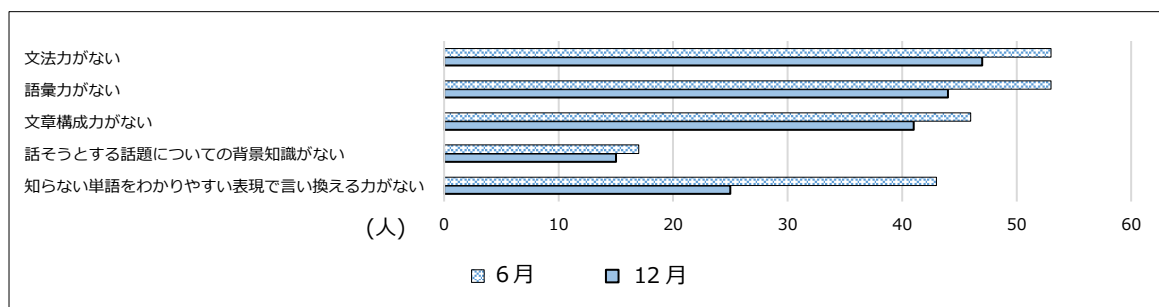


図 28 英語を話すときに困っていること

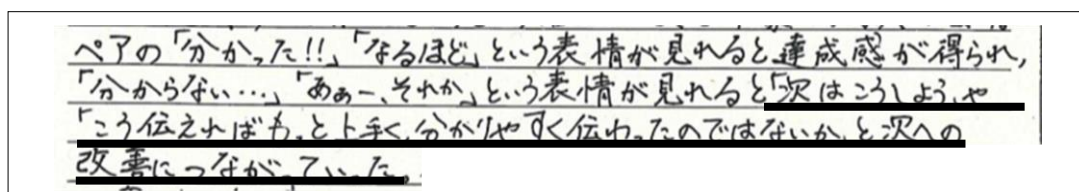


図 29 2分間パラフレーズチャレンジの感想

イ 目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるため指導の工夫

検証授業Ⅰでは、ルーブリックの評価項目が多かったことから、生徒が相互評価を行う際にうまく活用できなかったことから、検証授業Ⅱでは項目を精選した。評価項目を生徒と共有することで、見通しを持った活動に取り組ませることができた。さらに、検証授業Ⅱでは、タブレット端末を活用したり、プレゼン原稿作成時に、文章構成を提示したりすることで、検証授業Ⅰよりも、生徒のプレゼンに対する取り組み方が積極的になった。6月の実態調査で、最も興味がある活動として「話すこと〔発表〕」を選んだ生徒は最も少なく、スピーチやプレゼンを行うことに対して苦手意識が高いことが伺えた。そこで、検証授業ⅠとⅡを通して、授業開始時に「英語を間違えるのは当たり前。間違えることを楽しむくらいの気持ちでチャレンジしよう。」という声掛けを続けてきた。この姿勢に関しては、生徒の英語を話すことに対する考えに対して大きく影響があったことが、振り返りシートの記述内容から分かる（図30）。

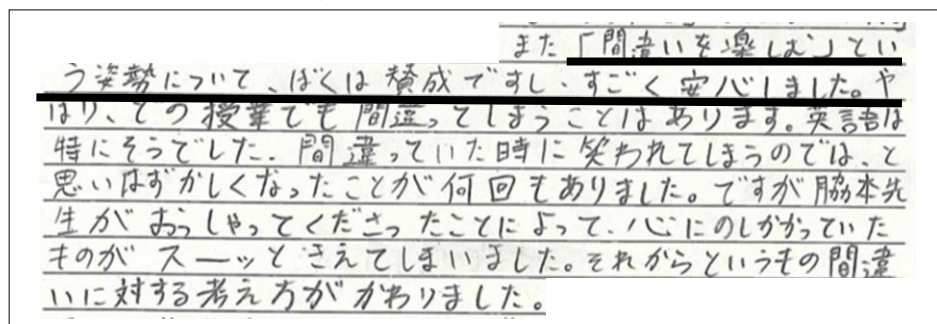


図30 間違いを楽しむことについての感想

プレゼンを行う際の形態として、少人数グループからクラス全体へ、と段階を経て実施することで、人前で英語を話すことへの抵抗感を減らす手立てをとった。検証授業後のアンケートでは、「ペアやグループで英語を話すことの抵抗感」は6月と比較して減少したが（図31・33）、「クラス全体で英語を話すことへの抵抗感」は、高くなった（図32）。これは、これまでにプレゼンを行ってこなかった生徒たちが、今回クラス全体の前で英語を話す状況になり、改めて抵抗感を感じたからであると考えられる。プレゼンの準備段階で、発表の練習をする時間を確保し、教師からのアドバイスを受けることで自信を付けた状態で、全体での発表を迎えることができれば、この抵抗感は減るものと考えられる。

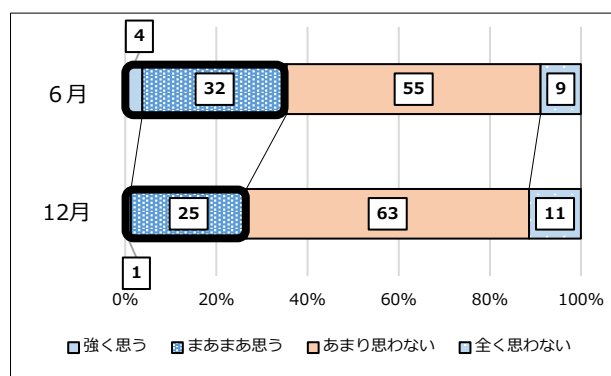


図31 英語を話すことへの抵抗感（ペア・グループ）

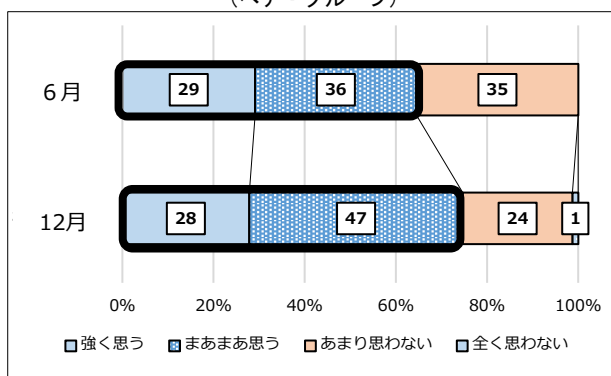


図32 英語を話すことへの抵抗感（クラス全体）

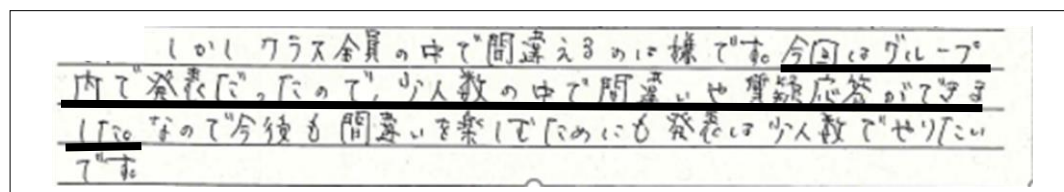


図33 プレゼンをクラス全体の前で行うことについての感想

全体の8割以上の生徒が、他の人のプレゼンを聞いて、自分のプレゼンを改善する参考になったと答えていることから（図34）、プレゼン自体はとても有意義な活動であると考えられる。さらに、8割以上の生徒が、質疑応答をすることでプレゼンの内容が深まると感じていた（図35）。質問する力を向上させるために、内容を深めるためにはどのような質問をすればいいか、という観点で授業で指導することが大切であると考えられる。

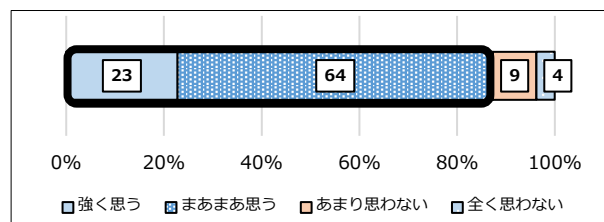


図 34 他の人のプレゼンを聞いて、自分のプレゼンを改善する参考になった

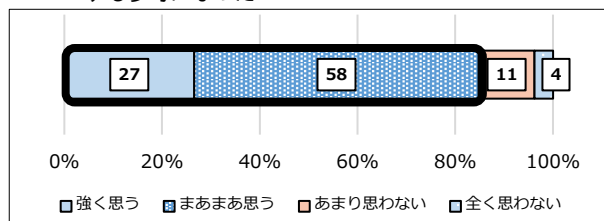


図 35 質疑応答をすることで、プレゼンの内容がさらに深まった

(3) 生徒の発話の比較

ア 2 分間パラフレーズチャレンジ①で見られた生徒の発話例

	説明されるもの	生徒の発話の一部
検証授業Ⅰ	Shaved Ice (かき氷)	・ very cold ・ delicious ・ summer festival
検証授業Ⅱ	Takoyaki (たこ焼き)	・ octopus ball ・ octopus in ・ Osaka people eat. ・ You can eat when you go to Osaka. ・ It is very hot, delicious food in Osaka. ・ It is like Okonomiyaki, but it is small.

* 原文のまま掲載

検証授業Ⅰにおいては、語彙を並べるだけだったり、日本語を直訳したりする生徒が多かったが、検証授業Ⅱにおいては、主語と動詞で構成した文で説明したり、接続詞のwhenを用いた文で説明したりする生徒が増えた。

イ 検証授業Ⅱで見られた原稿作成の工夫

生徒Aが書いたプレゼン原稿
I think Japanese food is very cool because I have three reasons. First, Japanese food is beautiful and delicious. Second, it has a long history. Some Japanese food has been handed down since long ago. Third, ①some taste different depending on the area. ↓ ②different area has different taste. For these reasons, I think Japanese food is cool and you should eat it.

検証授業Ⅱの自己表現活動「あなたにとってのCool JapanをALTやクラスメートに説明しよう。」の原稿例である。検証授業Ⅰでは、モデル文の一部の単語を書き換えるだけの生徒が多かったが、検証授業Ⅱでは、モデル文を提示する際に、教師が論理的文章の構成を提示し説明することで、具体的な例を挙げ、自分で考えた表現を用いて原稿を作成する生徒が増えた。また、原稿作成時にパラフレーズをする生徒も見られた。上記の生徒は、日本食の素晴らしさについて書いた。下書きの段階では、「地域によって味が違う」という文を、辞書を使いながら下線部①のように書いた。しかし、ペア活動の際、相手に伝わりにくいということが分かり、二人で協働し、清書の段階では、下線部②のように言い換え、より聞き手に分かりやすい表現を用いて原稿を作成することができた。

ウ 検証授業Ⅱでのプレゼンと質疑応答の例

プレゼン 発話例	I think musical road is cool because I have three reasons. First, musical road is very exciting when I'm in a car. For example, will you have fun when you hear music from the road? Second, it is rare in the world. Third, it is also in <i>Kagoshima</i>. For these reasons, I think musical road is cool and you should listen to it.
質疑応答例	S1: Where is the musical road? S2(Presenter): It's in <i>Kagoshima</i> city, maybe. ALT: If you make a musical road, what song do you want? S2: Hmmm... "<i>Believe</i>". ALT: A song called "<i>Believe</i>"? Sorry I don't know it. JTE: Oh maybe I know the song. "例えば君が傷ついて～♪", right? S2: Yes!! JTE: I will tell you later, ○○ (ALT の名前) .

検証授業Ⅱのプレゼン原稿と、発表後の質疑応答の例である。プレゼンの題材として、日本食やアニメを扱った生徒が多い中、上記の生徒は、「音響道路」(写真2)というユニークな題材を選んだことと、英文の分かりやすさが評価され、グループのベストプレゼンターに選出された。既習の語彙で構成された英文であったため、全体で発表した際も、すぐに質問があった。やり取りの深まりという点では、これから深化させる必要があるが、質疑応答の後に、生徒から「実際に何の曲が流れているか、質問すればよかった。」、「鹿児島にそんな場所があるなんて知らなかった。詳しい場所を尋ねる質問をすればよかった。」という声が聞かれ、以前には見られなかった、英語で発言することに対して積極的な姿勢が見られた。



写真2 音響道路の写真

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような帯活動を取り入れることで、どのように表現したらより相手に伝わるかという視点が生まれ、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながった。
- (2) 自己表現活動を充実させるための指導の工夫を行うことで、プレゼン後に積極的に質問をする姿や、質問に答えようとする姿が見られ、即興で話す力の育成につながった。

2 研究の課題

- (1) 自己表現活動を行う時間を生み出すためには、年間指導計画の工夫が必要である。他の英語科の職員との連携を図り、どの単元で自己表現活動を位置付けるかについて検討し、そのために単元ごとに軽重をつけて指導を行う。
- (2) 人前での発表を苦手とする生徒が多いが、即興的にやり取りさせる場面を毎時間設定し、継続的に少人数の前でスピーチやプレゼンをする経験を積ませ、苦手意識を克服させ、自己表現力を育成するとともに、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

〈参考文献〉

- | | | | | |
|------------------|----|--|--------|-----------|
| ○ 向後秀明 | 編著 | 『平成 30 年版 学習指導要領改訂のポイント 高等学校 外国語（英語）』 | 2019 年 | 明治図書出版 |
| ○ 金谷 憲 | 編著 | 『高校英語授業を変える！—訳読オンリーから抜け出す 3 つのモデル—』 | 2011 年 | アルク |
| ○ 金谷 憲 | 編著 | 『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは—アウトプットの時間を生み出す高校英語授業—』 | 2017 年 | アルク |
| ○ 和泉伸一 | 著 | 『第二言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える—より良い英語学習と英語教育へのヒント—』 | 2016 年 | アルク |
| ○ 田中武生 | 編著 | 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 | 2003 年 | 大修館書店 |
| ○ 泉恵美子 | | 『英語スピーキング指導ハンドブック』 | 2016 年 | 大修館書店 |
| ○ 門田修平 | 編著 | | | |
| ○ 酒井英樹 | 編著 | 『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』 | 2018 年 | 大修館書店 |
| ○ 青木ゆか | 編著 | 『ずるいえいご』 | 2014 年 | 日本経済新聞出版社 |
| ○ 西岡加名恵 | | 『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価—「見方・考え方」をどう育てるか—』 | 2019 年 | 日本標準 |
| ○ 石井英真 | 編著 | | | |
| ○ 文部科学省 | | 『高等学校学習指導要領解説 総則編』 | 2019 年 | 東山書房 |
| ○ 文部科学省 | | 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 | 2018 年 | 開隆堂出版 |
| ○ 文部科学省 | | 『高等学校学習指導要領解説 外国語編』 | 2019 年 | 開隆堂出版 |
| ○ 中央教育研究所 | | 『研究報告 No. 86 平成 28 年度版中学校英語教科書における語彙調査』 | 2016 年 | |
| ○ 鹿児島市立伊敷中学校 | | 『新しい時代を切り拓く資質・能力を身に付けた生徒の育成—教科横断的な視点で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメント—』 | 2019 年 | |
| ○ 鹿児島大学教育学部附属中学校 | | 『新たな時代を豊かに生きる生徒の育成—1 年次—』 | 2019 年 | |
| ○ 鹿児島市立山下小学校 | | 『未来の創り手の求められる資質・能力を育成する授業づくりⅡ—主体的・対話的で深い学びの実現を通して—』 | 2019 年 | |
| ○ 鹿児島市立田上小学校 | | 『共に学び 未来に創るⅢ—「深い学び」の実現に向けた授業改善—』 | 2019 年 | |

長期研修者 [脇本 由里香]

担当所員 [常山 隆光]

【研究の概要】

本研究は、生徒の英語学習への苦手意識を軽減させ、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度や即興でやり取りする力を育成するために、既習の語彙等を用いて「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫や、目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させるための指導の工夫を取り入れた授業について研究したものである。

具体的には、帯活動として、「2分間パラフレーズチャレンジ」の時間を設け、未知の単語や表現するのが難しい日本語であっても、対象物や日本語の表す意味を自分なりに解釈し、既習の語彙等を用いて表現できることを生徒に認識させた。また、自己表現活動を充実させるために、事前にループリックを提示し、明確な到達目標をもってプレゼンテーションに取り組ませ、コミュニケーションの相手を意識した原稿作りや、プレゼン後の質疑応答に挑戦させた。

その結果、「相手に伝わった」という成功体験が増え、英語の学習に対して肯定的な感情が高まり、主体的に英語を話そうとする生徒が増え、即興で話す力の育成につながった。

【担当所員の所見】

本研究では、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度や即興的にやり取りする力の育成を目指した。

そこで、生徒が既習の語句や文法事項等を用いて英語を話して「相手に伝わった」と実感できるような指導の工夫と目的や場面、状況などに応じた自己表現活動を充実させる指導の工夫について研究を行った。

「2分間パラフレーズチャレンジ」の取組における取組は、英作文や実際のコミュニケーションにおいても十分役立つと考えられる。

また、プレゼンテーションの際に提示したループリックの作成と提示は、教師の指導と評価の一体化に役立つと同時に、生徒が目標を明確にして活動に取り組むことができるため重要となる。生徒同士の質疑応答を充実させ、即興的にやり取りする力を更に高めてほしい。

今後、言語活動やパフォーマンス評価を充実させる必要があるが、そのためにどのように時間を作り出すかが大きな課題となる。その点を含め、今後も継続的・計画的に研究・実践を進めてほしい。